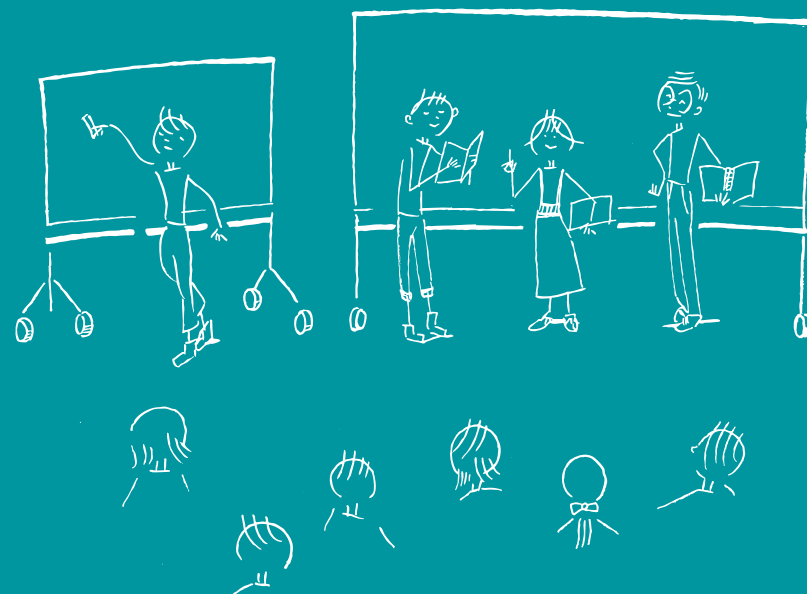


屋外のある場所で。

片方の大きな「黒板」では、3人の話者が、1つのテーマについて、それぞれが持ちよった「本」を起点に思い思いに語り、書いている。もう片方の小さな「黒板」では、記録者がその動向を黙々と書き、描いている。読み・語り・書き・描くことの間で、おたがいが触発しあい、からまったり、笑ったり、チョークの粉にまみれつつ、観客も一緒になって、話は思わず転がっていく。そして、2面の「黒板」に散らかった言葉や図像、思考の「ドラフト[草案／下絵／設計図 etc.]」を眺めて、また1つテーマを抜き出し、次回の話者たちに繋いでいく……

2021年の春頃から、芸術学部・体幹教育の教員や学生を中心に構想し、継続的に試みてきた、芸術表現をとめどない「外」へと解き放つためのプラットフォーム「ドラフト・ライブラリー」を、京都精華大学ギャラリー Terra-Sの空間の中で再構築しながら、新たに展開していきます。ネットやデータはひとまず脇に置き、移動自由な「黒板」と「本」をつかい、風通しのよい屋外で誰もが参加できる、京都精華大学ならではのローカル・メディア。読書のフィジカルな拡張であり、決まった形をなさない潜在的な図書館。来たるべき世界へ向け、広い視野で、芸術表現や知の変成をうながす相互作用の場「ドラフト・ライブラリー」を創りだすプロセスを、皆さんにも共に体験していただければ幸いです。



ドラフト・ライブラリーとは

「ドラフト・ライブラリー」は

2021年度学長指定課題への取り組みとして発案しました。

リベラル・アーツの視点から芸術表現の可能性を語り合い、
新たな社会におけるその役割を見出す、

応用的な実験の場となることを目指しています。

① 食堂

10月12日(火)

会場＝食堂前 登壇者＝中野裕介、中村裕太、劉李杰 グラフィックレコード＝山本理恵子

中野裕介
アーティスト／京都精華大学芸術学部教員

『意味の論理学上』
ジル・ドゥルーズ〔著〕 小泉義之〔訳〕
新潮社 2007年

アクリル板で空間を条理状に区切られ、コロナ禍で変質し分裂した「食堂」の姿。「食べること＝話すこと」「食物について話すこと＝語を食べること、どちらが重たいか」等、非物理的な出来事の発生を説く脱哲学の、狂気の難文ゆえの思わぬ誤読が妄想に火を付け、zoomでの会話（情報＝意味）が決定的に欠く、物質空間（食べ物＝体液＝ウイルス＝空気）を介した交流、その実感について何事かを示唆する気がして選びました。

劉李杰
京都精華大学芸術研究科
博士後期課程特別研究生

『朝食の歴史』
福田浩・杉本伸子・松藤庄平〔著〕 新潮社 2008年

明治期の洋画家・高橋由一といえど、《鮭》だろう。けれど、僕は《豆腐》に惹かれる。由一は俵板の上に木綿豆腐、焼き豆腐、油揚げを描き分け、俵板からは豆腐から染み出した水分や包丁の傷なんかも描いている。学生の頃、スーパーで買ってきつた3つの豆腐を俵板の上に並べて、そのパリエーションを観察した。本書は3つどころか、100個の豆腐のトランスフォーメーションが掲載されている。

中村裕太 美術家／京都精華大学芸術学部教員

『豆腐百珍』
福田浩・杉本伸子・松藤庄平〔著〕 新潮社 2008年

自己表現は絵画や文章だけでなく「飲食」にも現れます。中国の食堂には油条（揚げパン）、お粥、焼き餅など、様々な朝食メニューがあります。この本は、朝食が現在の形態になるまでにどのような変遷があったのか、その物語を紹介する一冊です。

劉李杰
京都精華大学芸術研究科
博士後期課程特別研究生

『朝食の歴史』
福田浩・杉本伸子・松藤庄平〔著〕 新潮社 2008年

自己表現は絵画や文章だけでなく「飲食」にも現れます。中国の食堂には油条（揚げパン）、お粥、焼き餅など、様々な朝食メニューがあります。この本は、朝食が現在の形態になるまでにどのような変遷があったのか、その物語を紹介する一冊です。

10月25日(月)

会場＝ドラフト・ギャラリー前

登壇者＝
小出麻代
新道牧人
武田俊彦
グラフィックレコード＝
中野裕介

小出麻代 美術家／京都精華大学芸術学部非常勤講師

『リボンと角柱』
池田タダヒコ〔著〕 2019年

著者である池田タダヒコ先生のゼミで学生時代を過ごした私の脳には、メキシコ＝池田タダヒコという図式が反射的に浮かぶ。ページいっぱいに広がる、古代文明に生きる人々を描いたようなドローイングを眺めているとメキシコ遊学時代の話をしながらギターをかき鳴らす先生、その隣でコロナビールを飲む生徒たち、そして行ったことがないにも関わらず、なぜか親しみのあるメキシコの風景にいつのまにか包まれている。

新道牧人 アーティスト／京都精華大学芸術学部非常勤講師

『Mexico』
Stephen West〔著〕 KONEMANN 2018年

ドラフト・ライブラリー第2回のテーマ「メキシコ」を受けて私のメキシコ人の義母がメキシコより送ってくれた本を紹介。ドイツ・ケルンに本社を置くクレーマン社の発行する縦338×横228×厚さ45mm 重量3.5kg総ページ数が504ページもある大きな本。メキシコ全土の美しい景色が豊富な写真で紹介されている写真集。印刷は中国でされているみなので、メキシコ→ドイツ→中国→メキシコ→日本と経由してやってきた旅する本である。

佐藤光儀
日本画家／京都精華大学芸術学部教員

『日本の紙 紙漉村旅日記』
寿岳文章・しづ〔著〕 講談社 1994年

和紙研究の神様と言われる寿岳文章・しづが紙漉村を巡る日記。旅先で出会う良質の和紙と粗悪な紙に一喜一憂しながら、旅館の印象まで細かに描写した偽りのない旅日記。寿岳文章は和紙本来の製法を守らずバナルブや化学薬品を使用した和紙風の紙を「病的な白」と嘆いた。高度経済成長期の障子や照明など住宅の近代化は「色の見え方」を変え、その要素の一つに和紙製造の近代化があると考える本を選んだ。

佐藤光儀
日本画家／京都精華大学芸術学部教員

『日本の紙 紙漉村旅日記』
寿岳文章・しづ〔著〕 講談社 1994年

和紙研究の神様と言われる寿岳文章・しづが紙漉村を巡る日記。旅先で出会う良質の和紙と粗悪な紙に一喜一憂しながら、旅館の印象まで細かに描写した偽りのない旅日記。寿岳文章は和紙本来の製法を守らずバナルブや化学薬品を使用した和紙風の紙を「病的な白」と嘆いた。高度経済成長期の障子や照明など住宅の近代化は「色の見え方」を変え、その要素の一つに和紙製造の近代化があると考える本を選んだ。

佐藤光儀
日本画家／京都精華大学芸術学部教員

『日本の紙 紙漉村旅日記』
寿岳文章・しづ〔著〕 講談社 1994年

和紙研究の神様と言われる寿岳文章・しづが紙漉村を巡る日記。旅先で出会う良質の和紙と粗悪な紙に一喜一憂しながら、旅館の印象まで細かに描写した偽りのない旅日記。寿岳文章は和紙本来の製法を守らずバナルブや化学薬品を使用した和紙風の紙を「病的な白」と嘆いた。高度経済成長期の障子や照明など住宅の近代化は「色の見え方」を変え、その要素の一つに和紙製造の近代化があると考える本を選んだ。

12月7日(火)

会場＝自在館

登壇者＝

中野裕介

中村裕太

グラフィックレコード＝

山本理恵子

中野裕介 アーティスト／京都精華大学芸術学部教員

『ベケットのほうへ』
宇野邦一〔著〕 五柳書店 2021年

「時間と人間と場所が純粋に支離滅裂であることは、少なくとも愉快なことだ」。こうした表現において、狂いや戯行・破れ・吃音など、まさに「ゆかい」な境地に到達できるか？世界が元々そうだったとしてそれを肯定できるか？そんな奇妙な意思を携える僕にこの一文は響きました。言語に穴をあけ、時空間の可能性を尽し、潜在性が冴えたく境界領域で遊ぶ喜びを、ブレな「語るベケット」-宇野邦一の本に大いに動まされます。

中村裕太 美術家／京都精華大学芸術学部教員

『樺会展 2013』
寶生堂企業文化部 2013年

赤瀬川原平さんは「ガラス絵・ハグ」という文章のなかで、「15年前に自分で初めて建てた家が、材木が削りっぱなしの、せいぜいグラインダーを少ししかけたぐらいの荒い作りにした。(…)それはともかく、前から使っていた家具を持ちこんだが、ぜんぜんそぐわないのだ。感覚がぜんぜん違う。ふと、思い立って、自分の愛用の鉋を取り出した。」と記し、表面を「はく」したテーブルと椅子を会場に並べた。

⑥ ゆかい

12月20日(月)

会場＝

自在館

登壇者＝

神田凛

新道牧人

宮永亮

グラフィックレコード＝

中野裕介

新道牧人 アーティスト／京都精華大学芸術学部非常勤講師

『千年の愉楽』
中上健次〔著〕 河出書房新社 1982年

ドラフト・ライブラリー第6回のテーマ「ゆかい」→愉快・愉楽とすぐにこの小説に導かれた。しかしながら一般的なゆかいとは程遠い内容である。千年の愉楽は中上健次の連作短編集。和歌山県新宮市の「路地」に住む全ての人の生き死にを記憶している産婆オレウノバを語り部にした繰り上げられる若者たちの利便的な生き様の物語。2013年に若松孝二監督によって映画化されている。

神田凛 京都精華大学芸術学部学生

『お金をかけないでシックに着こなす法 チープ・シック』
カタリーヌ・ミリアス・キャロル・トロイ〔著〕 片岡義男〔訳〕 草思社 1977年

私は今回、一番身近に感じる人の見た目や衣服から見る「愉快」を考えました。見た目で人を判断することがあると思いますが、正にファッションはその判断材料の一つになっていると感じます。この本では写真と共に様々なファッションが紹介されていて、参考になる面白いので取り上げました。例としてちんどん屋やピエロを挙げて話をしました。

宮永亮 ビデオ・アーティスト／京都精華大学芸術学部教員

『宇宙船レッド・ドワーフ号 DVD-BOX [日本版]』
BBC〔制作〕 Happinet (SB) (D) 2003年

「ゆかい」という言葉にはポジティブな意味だけでなく、様々な悲哀も同時に含んでいるように思う。特に「ゆかいな仲間たち」といった場合、登場人物たちの喜びも悲しみも不条理なものになったものが笑ひ昇華されるのだと思う。このBBC制作、NHK放映のドタバタSFコメディにはそんな世界が凝縮されている。

1月11日(火)

会場＝

自在館

登壇者＝

武田俊彦

山本夏綺

劉李杰

グラフィックレコード＝

山本理恵子

劉李杰 京都精華大学芸術研究科博士後期課程 特別研究生

『北京 一路地裏エンターテインメント』
于潤琦〔著〕 岩崎堂子〔訳〕 毎日新聞社 2008年

「レッド」＝「赤い」＝「中国春節」のイメージがすぐに浮かび上がります。中国人にとって「赤色」は慶事や喜びを象徴する縁起のよい色なのです。この本は、春節期間の北京の伝統的娯楽を紹介する本です。

武田俊彦
彫刻家／タダグ工作所代表／
京都精華大学芸術学部非常勤講師

『村岡三郎展 図録』
東京国立近代美術館 1997年

美術家村岡三郎氏の展覧会図録。物質と関わりながら、自身の身体と熱や現象による形態の変容を軸とした唯一無二の作家。感覚質に訴えかけるその作品は、物質を超えて観る人の感覚を刺激する。村岡氏と共にした時間の中で「赤い空を描きたい」と話していた事が今でも重要な出来事として私の脳に残っている。「感覚を伝えることは名詞では不都合です。」形容詞が良いのです。」と。

山本夏綺 秋田公立美術大学大学院生

『野田秀樹 赤鬼の挑戦』
野田秀樹、鴻英良〔著〕 青土社 2006年

レッドというテーマを「赤」と捉え、タイトルに赤が入った野田秀樹の戯曲「赤鬼」を紹介した。ストーリーに登場する人物、「赤鬼」と「あの子」の呼称の比較から、集団の中から個人の存在を取り出す役割も「赤」な色を持っているという話をした。また、ストーリーの中で起こるカニバリズムについても取り上げた。その行動劇に見る、相手を自分と同じだとする考えが、個人を失わせる見方であることも話題とした。